

霞ヶ浦の紅い鯨

白井啓治

葉津ちゃんと野之くんのおじいさんが亡くなった。

今夜はお別れのお通夜なのだけれど、おじいさんの遺言でなにもしないことになった。お父さんもお母さんも「格好がつかない」と困っていましたが、おじいさんの遺言だからなにもできないのでした。

亡くなったおじいさんは、白いお棺の中に寝かされて、おじいさんが使っていたそのままの部屋に置いてありました。

よそのうちで誰かが亡くなったときには、お坊さんとか牧師さんなどがきてお経をあげたり、聖書を読んだりするのだけれど、葉津ちゃんと野之君の家ではなにもしなかったのです。

最後のお別れにきてくれた近所のおばさんやおじさんたちも、ちよつとびっくりしてしまいました。写真も飾ってなく、お線香をあげたりするところも作ってなかったのので、みんなどうして良いかわからなかったのでした。おじいさんのお棺をちよつとのぞくとすぐ居間にもどって、おじいさんが好きだったコーヒーを飲みながら、おじいさんの思い出を話していました。

そして、帰るときにはみんな、

「治（はる）さんらしいや」

「おじいさんらしいお別れでした」

と言っていました。だから泣いたりする人はいませんでした。

葉津ちゃんは小学六年生のお姉さん。野之くんは弟で小学一年生。二人ともおじいさんが大好きでした。

おじいさんと三人で、よく舟塚山古墳まで散歩をしながら、いろんな話をしてもらいました。

舟塚山古墳は、関東地方では二番目に大きく、茨城県では一番大きな古墳です。舟塚山古墳は、恋瀬川の河口近くの高台にあり、筑波山を目の前に仰ぎ見ることができるとても景色の良いところですよ。

舟塚山古墳の上で筑波山を見ながらおじいちゃんの話は、今まで誰にも聞いたことのない不思議なお話ばかりでした。

でも六年生になった葉津ちゃんは、ときどきおじいさんの話をすなおに聞くことができなくなりました。

おじいちゃんの話はとてもおもしろいのですが、あまりにも人とちがうことを言っているように思えたので、すなおに信じることができなくなり、ときどき反対したりするようになったのです。

葉津ちゃんと野之くんが二人でおじいさんのお棺の前にすわっていたら、おじいちゃんがいちばんなかよくしていた中根のお爺さんとお婆さんが入ってきました。

中根のお爺さんとお婆さんは、
「治（はる）さん。早すぎるじゃないか。あの世に行くときは一緒だ
っていったのに」

そう言って手を合わせると、おじいさんの入っているお棺をのぞきこみ、眠っているようだ、といってなみだを流すのでした。

それを見ていた野之くんが葉津ちゃんのひざを突付いて、
「おねえちゃん、あの世なんてないんだよね」

と小さな声で言いました。葉津ちゃんは、人差し指を口にあてて「しー」と言いました。

中根のお爺さんとお婆さんは、おじいさんにもういちど手を合わせ、葉津ちゃんと野之くんに

「大好きなおじいちゃんが亡くなってさみしいだろうけど、悲しんじやいけないよ。おじいちゃんらしい大往生

なんだから」

と行って部屋を出て行きました。

部屋の戸が閉まるのを待ちかねたように野之くんが、

「おねえちゃん、だいおうじょうってどういうこと？」

って聞きました。葉津ちゃんはちよつと考えてから、

「しあわせてことかも知れない」

と言いました。

「あのさ、中根のおじいさんが言ってたあの世なんてないんだよね。

おじいちゃんがそう言ってたよ」

「あるのかも知れないわよ。だって誰も行ったことないんだから分らないじゃないの」

「だっておじいちゃんがそう言ってたもん」

「おじいちゃんは、いつも人と違うことをいうの。皆はあると信じているの」

「でも僕はおじいちゃんのいうことはぜったいだと思う。だってうそ言ったことないもん」

「うそは言わないけど、人と同じことを言わなかった」

「ふーん。僕はわかんない。あのさ、死ぬってゼロになることだっておじいちゃん言ってたよ。でも僕、ゼロってこと良くわからないんだ。

学校の先生にね、死ぬってゼロになるってどういうことですか、って聞いたら、野之君のおじいさんは哲学者なんだねって言うんだ。おねえちゃん、哲学者ってなあに？」

人が死ぬとゼロになるといいうのは、葉津ちゃんもおじいちゃんから聞いたことがあった。

葉津ちゃんが五年生のときだった。お父さんが、おじいさんはへそ曲がりだと言っていたから、へそ曲がりな話なんだな、と聞いていたのでした。

「人や動物が死ぬというのは、ゼロになるといいうことだ。動物が生き

ているというのは身体の中で化学現象や物理現象が働いているからだ。葉津にはまだむずかしいことかもしれないが、そうなんだ。身体の中で化学とか物理の働きがゼロになったとき、動物は動物でなくなる。植物も同じだ」

そのとき葉津ちゃんは、おじいちゃんの話がむづしいのとおもしろくなかったので「フーン」といって遊びにいらしたら、

「人が死んだらどうなると思う？」

と聞いたのでした。

「人が死んだら天国に行くんでしょ」

と言うと、おじいちゃんは、

「じゃあ天国ってどこにあるんだね？」

と言いました。葉津ちゃんは、面倒くさくなって、

「皆がそう言っているんだからどっかにあるんでしょ」

と言ったら、おじいさんはちよつと悲しそうな顔をしました。そして、そのあとでこう言いました。

「天国と言うのはな、地球の自然のことをいうんだ。死ぬっていうのは、生物としての働きがゼロになるっていうことだけど、ゼロというのは永遠とか無限大ということだ。葉津にはまだむずしいことかも知れないけれど、中学生になったら少し分るようになり、高校生になったら少し理解できるようになり、大学生になってしっかり勉強して大人になったら葉津の言葉で理解することができるようになる」

葉津ちゃんは、おじいちゃんの話がどんどん難しくなっていくきそうではないやだったのでしたが、遊びに行ってくる、と言いにくくなって困ったように黙っていると、おじいちゃんはドンドン話を進めていったのでした。

「人が死んでゼロになると、人の身体を作っているいろいろな物資が、変形、変質、分解して行ってバラバラな一個の物質にもどっていくんだ。バラバラになった物質は、今度は何かほかの物質にくっついたり取り込

まれたりして違うものに組み立てられていくんだ。人の身体を作っている半分以上は水分だけど、水分は蒸発して空気の中に吸い込まれ雨や霧になっていく。たんぱく質だとかカルシウムなども何かの役に立ち新しい物が作られていくんだ。お祖父ちゃんが死んだら、お祖父ちゃんの身体を作っているいろいろな物質はまたどこかに利用されて、違った物になるんだ。もしかしたら雨水になったおじいちゃんを葉津が飲むかもしれない。地球のいとなみと言うのはグルグル何度も利用しあってまわっているんだ。だから死ぬというのはゼロになることで、ゼロは永遠なんだ。そして、天国というのは地球の自然のことなんだ」

葉津ちゃんは、おじいちゃんに何か言おうと思ったのですが、何にも言葉が出てこないのだからだまってしまいました。

「葉津にはまだちょっとむずかしい話だったな。でもいつか思い出したときには分るからそんな困った顔をするんじゃない。野之と舟塚山まで散歩に行くけど葉津はどこかに遊びに行くのかい」

「友達と約束してるから今日は行かない」

「じゃあ行きな」

おじいちゃんにそう言われ、やっと開放された気持ちになりあわてて走って家を出て行ったのでした。

その時のことを思い出して

「あの時はちょっとわるいことしたのかもしれない」

と葉津ちゃんは思いました。

また違う日のことでした。葉津ちゃんはおじいちゃんに「魂って何？」って聞いたことがありました。

「魂ってというのは、葉津にはまだちょっとむずかしいかもしれないが、心に残る言葉っていうことだな。例えば、おじいちゃんが死んでいなくなつたとしよう。何年かたつたとき葉津が、おじいちゃんがよく言っている『幸せというのはおいしいということ』という言葉思い出したと

しよう。その言葉は、葉津にとっておじいちゃんの言っていた言葉として覚えているのだから、その言葉を思い出したり、使ったりするときには必ずおじいちゃんのことを思い出してしまおうわけだ。だからその言葉はおじいちゃんなんだな。おじいちゃんが死んでも、おじいちゃんの魂は葉津のところにもいつもいるよ、というのほそういうことだ」

おじいちゃんの言っていた話を思い出したとき、魂ってやっぱり言葉なのかもしれないと葉津ちゃんは思った。

おじいちゃんの言っていたことを思い出しているうちに野之くんは眠ってしまいました。葉津ちゃんの肩にもたれかかってスースーと寝息をたてているのです。

葉津ちゃんは、静かに抱き起こして寝かせてやりました。野之くんは気がつかず、気持ち良さそうに眠っています。

野之くんは、とても甘ったれな弟で、葉津ちゃんの行くところにはどこでもついて行きたがりでした。友達に野之くんを見ると直ぐに、「今日も金魚のふんがついてきた」と言います。

葉津ちゃんが一人でどこかに出かけてしまうと、お姉ちゃんはどこ行ったの、って皆に聞いてまわるのでした。そして葉津ちゃんが帰ってくると、「どこへ行ってたの？ どうして野之をおいて行ったの？」とうるさくつきまとうのです

葉津ちゃんは、そんな野之くんがめんどうくさくなることもありませんが、置いていくとかわいそうなのでいつも連れて行くのでした。野之くんの気持ち良さそうな寝顔を見ていたら、おじいちゃんの言っていた夢の話のことを思い出しました。

ある日、葉津ちゃんが宿題をやっていたら、おじいちゃんと舟塚山に散歩へ出かけていた野之くんが帰ってきて、こう言いました。

「お姉ちゃん、マンタって知ってる？ マンタってね、海のヘリコプターなんだよ。僕今日マンタのヘリコプターに乗ったんだよ。すごいでしょう。下を見るとね、いろんな魚がいっぱい泳いでいるんだよ。すご

くきれいなんだよ。海はね、水の空なんだよ」

「それって夢みてたんでしょ。ほんとうに見たことじゃないじゃない」

「ほんとうのことだよ。だってちゃんと見たんだもん。おじいちゃんがいったよ。夢ってほんとうのことだって。夢って、寝ているときの目で見るんだよ。起きている時の目では見えないけど、ほんとうのことなんだって。おじいちゃんが教えてくれたよ」

葉津ちゃんがまだ小さかったとき、やっぱりおじいちゃんはそう教えてくれた。小さいときは信じていたけど、今は夢で見たことは本当のことではないことを知っている。でもおじいちゃんに言うのと、むずかしいことを言われるので言いませんでした。

夢が本当のことでないことが少し分ってきたとき、お母さんにその話をしたら、お母さんは、おじいちゃんは詩人だから、といって笑っていました。

野之くんにマンタのヘリコプターにのった夢のことを聞いた日、葉津ちゃんは夢のことを調べてみようかと国語辞典を調べてみました。

おじいちゃんの口ぐせは、「葉津にはちよつと難しいかもしれないけど」と話の最初に必ず言うことでした。そして最後に必ず、「本当のことを知りましたかったらいろんな本を読むこと。辞書を引くこと」と言いました。

おじいちゃんの部屋には、同じ国語辞典が何冊もあります。おじいちゃんに、何で同じ辞書がこんなにあるの、って聞いたら、言葉というのは時間がたつと使い方が変わったり、意味までも変わってきたりするんだ。だから何年かごとに書き直されるんだ、と教えてくれました。そして、時代の違う同じ辞書を見ていると、言葉の歴史がわかるよ、と教えてくれました。

葉津ちゃんは、一番新しい辞書で「夢」を調べてみました。そうしたらおじいちゃんが言ってたように、夢は「寝目（ねめ）」——寝ているときの目——が変化したもの、と書いてありました。

おじいちゃんの言ってたことは正しいんだ、と思いました。でもおじいちゃんの言うように夢が本当のことだとは思いませんでした。でも野之くんの先生がおじいちゃんのことを哲学者だねと言い、お母さんが詩人だと言うのは、ちよつとだけわかる気がしました。

もう誰も来ないみたいだから野之くんを起して皆のところに行こうかな、と思ったとき、とつぜん野之くんが、

「すごい！ 飛んでる！」

と大きな声で寝言を言いました。

葉津ちゃんはびっくりして、「野之どうしたの！」って、ゆり起こしてしまいました。

野之くんは、うーん、と眠そうに目をあけました。でも急に思い出したように大声で、

「おねえちゃん。僕、やっと見たよ。紅い鯨がさ、空を飛んだんだ。すごく大きくて夕焼けと同じ色をした鯨なんだよ。僕の頭の上をシャーッと飛んでいったんだぜ。そして筑波山のところでUターンして霞ヶ浦に帰って行ったんだ。すごかったんだよ」

と言いました。

「夢を見てたんでしょ。第一、霞ヶ浦には鯨はいないのよ」

と言うと、

「おじいちゃんと舟塚山に散歩に行ったんだ。おじいちゃんに霞ヶ浦に紅い鯨がいたらいいね、って言ったら、いるさって言うんだ。信じていればいつか必ず見られるよって言うから僕ズーッと信じていたんだ。そしたら見られたんだ。紅い鯨なんだぜ。すごいんだから」

「紅い鯨なんかいるわけないじゃない。野之は夢を見てたの。本当のことでないの。」

葉津ちゃんがそう言ったとき、

「おじいちゃんは哲学者で詩人」

という言葉が頭に浮かびました。そうしたら、もしかしたら夢だった。本当のことかもしれないと思うことができたのでした。

それで野之くんは、

「そう。良かったね、紅い鯨が見られて」

と言つて一緒に喜んであげました。

「おねえちゃんも一緒に行けばよかったね。そうしたら見られたのに。僕が、おじいちゃんに紅い鯨だって言ったら、おじいちゃんすごくうれしそうに笑ったんだ。そうだ、お母さんにも教えてあげよう」

野之くんは走つて部屋を出て行きました。

葉津ちゃんも立ち上がつて部屋を出ようとしたが、なぜだかおじいさんの顔が見たくなりました。

葉津ちゃんがお棺の窓をのぞくと、おじいさんがいつもの顔で眠っていました。葉津ちゃんは思わず、

「おじいちゃん。どうして葉津も散歩にさそつてくれなかったの？ 葉津も紅い鯨見たかったのに」

と恨みの言葉を言つてしまいました。

リビングからお母さんやお父さん達の楽しそうな笑い声が聞えてきました。その声に誘われるかのように葉津ちゃんが部屋を出て行こうとしたときでした。突然、おじいちゃんの声が聞こえてきました。

「おじいちゃんは、いつでも葉津ちゃんのそばにいるよ。今度、一緒に紅い鯨を見に行こう。夕焼けに染まった紅い鯨が霞ヶ浦から飛び上がつて、筑波山から竜神山をまわつてまた霞ヶ浦に帰っていくんだ。赤い尾びれをべールして水に沈んだとき、南の空にカノープスという赤い星を呼んでくれるんだ。野之は紅い鯨に夢中になつていたから気が付かなかつただけど、この星を見た者は幸せになれるといわれているんだ。そうだ、友達皆を誘つて舟塚山に紅い鯨とカノープスを見に行こう。皆で大声して呼んだらきつと紅い鯨のべールが沈んだとき、幸せの赤い星カノープスが現れるに違いない」

葉津ちゃんは思わず

「おじいちゃん、約束だよ」

と、声して振り返ったのですが、おじいちゃんは静かに眠ったままです。

でも葉津ちゃんはおじいちゃんに言いました。

「きつとよ。友達や皆を誘って紅い鯨と幸せの星カノープスを見に一緒に行こうね」

それでもう一度「約束よ」というと心の中に指きりゲンマンをしたのでした。

おわり